拝啓　今年も早や12月下旬、年の暮となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、紅葉がきれいな場所があり何度か紅葉見物に出かけましたが、その紅葉も終り頃です。

今回は、小西芳之助先生の『エペソ人への手紙講解説教』からの引用の第7回目です。今回のエンカウンターの第1頁「キリスト教は永遠の生命を教える宗教」には、次のように書かれています。

「ここへいらして聖書の講義を聞いていただいて、福音のこと、永遠の命のことはお信じにならなくてもよろしい。信仰は難しい。なかなか信じられない。信じられなくてもいいですから、キリスト教というものは、こういうことを教える宗教である、一言で言えば「永遠の生命を神様がただで与えてくだされた」ということをキリスト教は教える宗教であるということだけは知っておいてもらいたい。信じなくてもよろしい。そういうことを知っておいて頂きたい。キリスト教というものはこういうものであるであるということを。これは感情の問題ではない。知恵の問題です。意思の問題です。

それがまた、我々の人生にいかに必要なことであるか、それがわれわれに生きる力を与えることになるということは後から分かってきたらよろしい。初めから自分の日々の人生に応用する必要はない。そういうことを、だんだん私は年取ってきてわかってきた。」

エペソ人辺手紙の中に、贖いの信仰について触れているところが多いことに気が付き驚いています。これまで、すっと聞き流し、読み飛ばし、何も分かっていなかったという思いでおります。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』11月17日

「恵心流キリスト教

恵心流キリスト教とは、ロマ書10章9節である。

いわく、「口では我が主イエスと称うれば、救われるのである。ただし、心では、救われるのはイエスの名を称える力によるのではなく、神がイエスを復活せしめて成就し給いし贖いの力によると理解するのである」と。

新渡戸稲造先生『一日一言』11月19日

「学問は奥の奥まで研究するがよし。されど、身を修むる法、心の持ち方などは、ひたすら実行すべきもので、研究に日を費やすべきものでない。知らんと欲せばまず行うべし。理を究めて後に行わんとせば、百年ありても千年有りても不足なるべし。」

松下幸之助先生『道をひらく』「自分の仕事」

「どんな仕事でも、それが世の中に必要なればこそ成り立つので、世の中の人びとが求め

ているのでなければ、その仕事は成り立つものではない。人びとが街で手軽に靴を磨きたいと思えばこそ、靴磨きの商売も成り立つので、さもなければ靴磨きの仕事は生まれもしないであろう。

だから、自分の仕事は、自分がやっている自分の仕事だと思うのはとんでもないことで、ほんとうは世の中にやらせてもらっている世の中の仕事なのである。ここに仕事の意義がある。…

仕事が伸びるか伸びないかは、世の中が決めてくれる。世の中の求めのままに、自然に自分の仕事を伸ばしてゆけばよい。

大切なことは、世の中にやらせてもらっているこの仕事を、誠実に謙虚に、そして熱心にやることである。世の中の求めに、精いっぱいこたえることである。おたがいに、自分の仕事の意義を忘れたくないものである。」

内村鑑三先生『続一日一生』12 月 3 日

「キリスト教の存在の理由は、唯に存在と言うては足りません。その勢力と限りなき生長の理由は、その言葉にあるのではなくして、その能力（ちから）にあるのであります。神は議論ではなくて実力であります。人生は理屈でなくして実行であります。ゆえに、神を人類に紹介してこれを救うの宗教は、大なる能力でなくてはなりません。」

バークレー先生『ウイリアム・バークレイの一日一章』（11 月 19 日）

「単純なこと

仕事は何よりも大事なものである。悲しみと孤独にとざされたさびしいとき、仕事ほど慰めになってくれるものはない。…

愛する者や友達を失うのはつらい。だが仕事の対象を失うのは悲劇である。

単純なもののゆえに神に感謝しよう。

家庭と愛する者のために神に感謝しよう。

友だちのために神に感謝しよう。

とりわけなすべき仕事、またそれをなすための肉体的な力、手の技術、精神の能力のゆえに神に感謝しようではないか。」

レテー・B・カウマン先生　『荒野の泉』11 月 28 日

「朝早く起きて山に登り、神がどうして朝を造りなさるかを見守ってごらんなさい。太陽が地平線に出て来て、曇った黎明がくずれてくる。そしてさまざまの光線が、一つの完全なまるい光となって、わたしたちの目に映ずるようになる。それはちょうど昼の王が堂々と前進し、光の洪水で地と全ての低い谷間をおおい、神の稜威と朝の栄光をうたう天の合唱隊の音楽に、わたしたちが耳を傾けるようである。

夜明けの聖なる静けさに

われは一つの声をきく
「われはひねもすなんじとともにあり
喜べよ喜べよ」と

すがすがしい清い朝の光が、わたしの心の中に真理を追及させる。この真理のみが、わたしを朝のように清く、また明るくして、周囲にある自然界の音楽の調子に調和させる。…神が与えた夜と朝なしに、わたしたち憐れむべき人間は何をすることが出来るだろう。」

12 月 15 日（日）は、高円寺東集会のクリスマスで、礼拝には 9 名、ズームで 1 名の参加がありました。礼拝後、近所のイタリア・レストランに行き、祝会を持ちました。今井館教友会理事長の加納孝代先生が参加して下さり、光栄でした。

新型コロナについては、病院やクリニックではマスクをつけるように指導されていますが、インフルエンザと同時流行の心配もあり、電車の中とかスーパーでも、マスクをする人が再び多くなりましたが、外出された後の手洗い、うがいなどは、実行されて、コロナやインフルエンザにかからないように充分注意されるよう、祈り申し上げます。

2024 年 12 月 22 日　　山口周三

エンカウンターの読者各位